

平成24年度第1回宮崎県社会教育委員会議 議事録

期日：平成24年5月25日（金）

午後1時30分～3時30分

会場：県立美術館 会議室

テーマ 「地域教育プラットフォームづくりをどのように進めていくか」
協議の柱 各地域・学校で、様々な団体や組織が、ネットワークを形成し、それぞれの教育力を発揮して、教育支援活動を展開するための組織づくりはどうあればよいか。

森山議長 昨年度の協議の内容を整理するために、「提言の中間まとめ」と「今後の計画」の説明をお願いします。

事務局 （「提言の中間まとめ」と「今後の計画」を説明）

「提言の中間まとめ」のキーワード

■ 家族の絆づくり

家庭の教育力の向上のためには、保護者と子どもが共働・共汗できる環境を積極的につくり、家族の会話が深まる時間を設け、「家族の絆づくり」を育むことが大切である。

■ 多様な主体による横の連携

地域の教育力の向上のためには、地域の状況に応じて公民館や子ども会などの社会教育関係団体や企業・団体等がそれぞれの役割を果たしつつ、相互の活動を連携させてコミュニケーションを図ることが大切である。

■ 人材の地育地活

地域活動を活性化するためには、子どもたち自らが地域の行事等に主体的に関わる仕組みづくりを行うなど、地域に貢献できるように育て、次の人材育成に活かすサイクルをつくること、いわゆる「人材の地育地活」が望まれている。

■ 地域教育のプラットフォームづくり

コミュニティ社会を再構築するためには、地域の課題や目標を意識するとともに、情報の共有化が必要である。その課題を解決するためには、地域の指導者や関係機関・団体が集まり、必要とされる情報や教育資源を提供し合い、地域の社会教育を推進していく仕組み、いわゆる、地域教育のプラットフォームづくりが望まれている。



本年度は、第1回「地域教育のプラットフォームづくり」、第2回「多様な主体による横の連携」「人材の地育地活」、第3回「家族の絆づくり」、第4回「提言のまとめ」という計画で進めさせていただきたい。

森山議長 今回は「地域教育プラットフォーム」について協議したいと思う。事務局より説明をお願いする。

事務局 (資料をもとに、プラットフォームについて補足説明)

「地域教育プラットフォーム」のイメージ

- ・ 学校支援に意欲のある地域住民が協力し、その経験や知識、知恵を発揮して、学校を中心とした多様な教育活動を支援する仕組み
- ・ 具体的な支援の内容
「学習活動支援」「登下校安全確保活動」「部活動支援」「学校行事運営支援」「環境整備活動」「読書推進活動」などが考えられる。

このことによって、学校は、子どもと向き合う時間が保てる。子どもにとっては、多様な大人と出会い、体験の場を広げることで、よりよい環境の中で学習できる。地域や家庭にとっては、これまでに培ってきた経験、知識、知恵を子どもに伝え、生かすことができる。

森山議長 杉田委員が行っているプラットフォームに近い実践と白水委員がもっている案について説明をお願いします。

杉田委員 (鞍岡地域づくり協議会の説明)

旧役場の建物で放課後子ども教室を実施し、一部役場の仕事を請け負う形となっている。事務局から示された資料に、地域づくりの視点を加えればよいのではないかと。必要なのは事務局の備品と機能である。

白水委員 協議会は地域の様々な団体で構成されているが、子どもの代表は参加しているか。

杉田委員 直接、協議会には子どもの代表はいないが、いるといいのかもしれない。ただ、放課後子ども教室に参加している中学生が、地域紹介パンフレットを作成し、修学旅行先の商店街で伝統芸能の踊りを披露し、パンフレットを観客に配布し、地域を宣伝した取組もあり、子どもはなくてはならない存在である。

山下副議長 鞍岡地域づくり協議会は、プラットフォームに大変近いがメンバーの構成はどうか。

杉田委員 五ヶ瀬自然学校が事務局となり、婦人会や青年団、子ども会はないので、公民館長や役場の職員など20名程度で構成している。



山下副議長 杉田さんが仕掛け、公民館長と会話をしながら進めているのか。

杉田委員 私が公民館長と話しながら進めている。資金がないとなかなか動けないので、今年までは農水省の補助金があるが、来年のことも見据えて取り組んでいる。補助金は、必ず期限内に実践しなければならないので、短期間の課題解決には向いている。

森山議長 鞍岡地区の活動は、五ヶ瀬町内には広がっているのか。

杉田委員 昭和の大合併の後遺症がまだ残っており、進みは悪いが、少しずつ民泊と自然体験をセットにした取組が広がりを見せている。

森山議長 市町村レベルの小さいプラットフォームが実働的であり理想である。五ヶ瀬町は、取組のヒントとなる。五ヶ瀬町から県全体へ広げていただきたい。

白水委員 (学校区ごとの公民館を拠点としたまちづくり会議のプラットフォーム案)
組織を維持していくためには、お金と人材が必要だが、それが無くなった時が問題である。

都城市の中学校区ごとのまちづくり協議会は、与えられた財源の使い道を地域で話し合える。

ただ、子どもたち参加の行事やイベント案がいろいろ出ても、そのことを誰が、いつ、どうやるのかという話になると、そこでもう停滞してしまう。

五ヶ瀬町では、杉田さんのようなNPO活動があるが、小松原地区にはそのようなNPOもないので、ここで推進中核団体になり得るのは、子ども会育成会であると思う。

自治公民館単位での子ども会が、灯籠づくりや十五夜まつりなどを実施している例がよく見られるが、情報を横につなぎ、その活動を支える大人の人材を発掘・養成するのが校区や市の子ども会育成会の役目であると思う。

福岡県の糸島市では、小学校区及び市の子ども会育成会がジュニア・リーダーを育成しており、その指導にあたる大人たちは、指導者の会で研修し、福岡県教育委員会が指導者に対しプレイリーダー認定をしている。小中高と活躍したジュニア・リーダーが大人になり、やがては地域で指導する立場になり、青年団や消防団で活躍する存在となっていくようである。

小学校区か中学校区か、地域によって「集まる」「共有する」規模は違うと思うが、地域の人が集まり、問題や課題解決できる範囲のプラットフォームがよいのではないか。そのためには、学校、自治公民館、PTA等の役割を整理する必要があると思う。



横山委員 都城市では、中学校区別であったが、佐土原町では小学校区別で組織されている。佐土原町には5つの小学校区域がある。その中で広瀬西小学校区では、ウォーキングや盆踊り、災害対応等を高齢者と一緒に行っている。課題は、子どもをいかに地域に入れるかであるが、まずは、見守りなどを通して人を知ることではないか。

森山議長 地域教育プラットフォームは、分かるような分からないような名称なので検討が必要である。事務局から説明をお願いする。

事務局 (資料をもとに、組織の名称について説明)

プラットフォームという名称は分かりにくいので、「地域教育推進ネットワーク協議会」にしてはどうだろうか。県レベルのネットワークをつくり、他のネットワークを紹介する機能をもたせていきたい。今年度中に、県レベルの組織を作り、どんな団体に参加していただくか考えていきたい。ただ単に会議を開催するのではなく、実践的なプラットフォームをめざしていきたい。

このネットワーク協議会については、3月の提言を待たずに、モデル的に実施してみたいと考えている。皆さんには、この協議会で何をすべきか議論いただきたい。予算がなくても継続できる仕組みをつくっていかなければならない。

森山議長 「地域教育プラットフォーム」よりも「地域教育推進ネットワーク協議会」の方がより親しみやすいのではないかという説明であった。飛田教育長のあいさつの中でも、今ある宮崎県の財産を生かすべきだと言われた。人材を含め、地域の素材をどう生かすかがポイントである。風土や風習が違うので、それぞれの地域で、地域をよりよくする仕組みを取り入れるべきである。地域ができないことは、市町村がやり、市町村ができないことは、県でやるとよい。

谷口委員 五ヶ瀬町や串間市は婦人会がなくなった。60年の歴史の県婦人会も縮小しているが、いくら合併が進んでも単位は地域である。五ヶ瀬町は顔が見える小さな単位でうらやましい。婦人会も現在は市町村単位でやっているが、もっと小さな単位でやっていきたい。横の連携が課題である。今年から始めることも賛成である。

長鶴委員 宮崎では、おじいちゃんが子どもの手を引く風景が残っている。宮崎には、素晴らしい人材がいる。その人材を子育てや教育に取り込む必要があり、そのために必要な仕組みだと思ふ。宮崎ならではのプラットフォームができる素地はある。目的達成はもちろんであるが、「継続できるか」がポイントであり、課題である。五ヶ瀬町の取組から、継続のヒントになることを教えてほしい。

杉田委員 過疎が止まらない。仕事がないから高校を卒業したら地元から出て帰ってこない。集落が消滅するという危機感を共通の課題としたい。解決したい課題を共有できれば中心となる人物は出てくる。

新しい人材も取り入れながら人を入れ替え、組織を活性化させる。そして町にも認めさせる。そこには新しい公共が生まれる。

山田委員 綾町は、中央公民館がプラットフォームの役割を果たしている。開館していればすぐに場所を貸してくれる。人が集まる場づくりができています。

県の組織の必要性は分かるが、個人的には、ホームページで地域の取組の情報を紹介するぐらいでよいのではないかと思います。

森山議長 プラットフォームは、集まって何かをするのでは長続きしない。日常生活の中にプラットフォームの構想ができていくというものでなければならない。



谷口委員 実際何かを計画するときには、顔を合わせるのは大切なことで、集まる場所が必要である。

しかし、公民館が指定管理になり、自由に使えないところもある。

鈴木委員 鞍岡地区は神楽や棒踊りの保存に保護者がかかわっている。串間市は保護者のかかわりが今ひとつで、よい企画なのに保護者の理解が十分でなく、参加できない子どもがいる。プラットフォームには保護者のかかわりが必要である。

長鶴委員 地域で現在やっている活動に、プラットフォームの考え方を注入すると、活動に広がりが出る。やってみようかという熱い思いのキーパーソンがいれば成功につながる。

ただし、それぞれがバラバラでやっていくのではなく、「地域教育推進ネットワーク協議会」のような調整をする組織は必要である。

久保田委員 まずは、県レベルの組織をつくり、そのメンバー同士のネットワークを築くことが大事だと思う。走りながらやってみることが大事ではないか。

黒木委員 都農神社の伝統行事には、地元の商工、農業、漁業、役場、幼小中高の人が集まる。その日は、何故かみんな他所からでも帰ってくる。どのように盛り上げていくかをみんなが考えている。地域の自慢をそれぞれが発信していけるとよい。

杉田委員 鞍岡地区でも、まずはみんなが参加できる祭りから始めた。その後、教育につなげている。

森山議長 時間がきたので、山下副議長にまとめをお願いします。

山下副議長 プラットフォームでも、ネットワークでも、それをどう具体化し、持続可能なものとしていくかが大きな課題である。そのための方策として、今日は二つのテーマが出てきたように思う。

一つ目は、地域の今ある取組を活かす社会教育の支援が必要という点である。実際に、限界集落と呼ばれるような地域においても地域は残っており、様々な取組の実践がある。ネットワーク化やプラットフォームの取組によって、潜在化している地域の教育資源や取組を目に見えるようにすることが大切である。

二つ目は、プラットフォームを形成する範囲の問題である。今日の議論では、小さい範囲の方が適格的ではないかという議論が中心であったように思う。また、今回提示していただいた資料については、学校教育に特化しすぎている点が気になる。本会議においても、思春期から高齢期まで、ライフステージに応じた課題が議論として出てきているので、学校教育は一つの柱として、ライフコース全体を見据えた組織づくりが大切である。

森山議長 今日のテーマは大きかったが、イメージが見えてきたと思う。今回の会議結果を十分に活用していただき、活動できる「地域教育推進ネットワーク協議会」ができることを期待して、本日の会議を終了としたい。

(終)